

能を切る



「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文||福永無想

第四回 「鶴子との別れ」

矢嶋家が中山手永(現・美里町)で暮らすようになって、10年が経った。20歳になった久子は、親同士が交わした約束通り、水保の徳富家の長男、一敬に嫁いだ。

またその頃、堅志田村の役宅には、源助の熊本遊学時代の友人知人が多く訪れ、その中に思想家の横井小楠がいた。

横井小楠は、家禄150石の熊本藩士の次男として生まれた。藩校・時習館で塾長となり江戸に遊学すると、水戸藩士の藤田東湖らと親交を結び、尊皇攘夷論を信奉する。尊皇攘夷論は、水戸学から生まれた思想で、すなわち「天皇を尊び、外国人を追い払う」というものである。しかし後に小楠は、開国論者に転じている。

小楠は私塾「小楠堂」を開き、武士や豪農たちに思想を説いた。久子の夫となった徳富一敬と兄の源助は筆頭の門弟で、その中に次女の順子の夫の竹崎律次郎もいた。

中山の郷に小楠が来訪すると思いを支

持する者たちが集まり、深夜に及ぶまで激しい論議を交わした。勝子たちも、隣の部屋で聞き耳を立て、胸を躍らせながら熱心に話を聞いていた。それは、ペリー率いる黒船が、浦賀沖に現れる少し前のことであった。

師走に入ると、矢嶋家の女たちは正月の準備で慌ただしい。3女の順子が竹崎家に再び戻ることになり、台所は鶴子を筆頭に、5女のつせ子と6女の勝子、7女の貞子がまかなっていた。

その日は、桶の水が凍ってしまふほどの寒さだった。直明に頼まれた書類を会所に届け役宅に戻った鶴子は、

「外は寒かよお。そろそろ餅つきの準備もせ……」

と言いかけて、突然、玄関口の土間に倒れ込んだ。

「かあさまっ！」

「どがんとしたとっ！」

驚いた娘たちは、すぐさま男衆の奉公人に鶴子を畳の上まで運ばせると、勝子は家を飛び出し医者の元に走った。駆けつけた医者から見立ては、中風だった。

(考えてみれば、少し前から予兆があった気がする…)勝子は振り返る。「裁縫をするとうしがしびれる」と言ったり、「近ごろは、なんさま口が乾く」などと、いつになく鶴子が口にする言葉に違和感を覚えたものだった。

「私をもっと早く、気づいておいたら…」

勝子は自分を責め立てた。しかし、医者への処置が早かったことで、どうかか鶴子は命をとりとめたのだが、それからは寝たきりになってしまふのだった。

鶴子が倒れてから正月が過ぎ、ふた月ほどして名残り雪が降った日のことだった。庭の梅に花が来ていた。つせ子は鶴子の部屋の障子を開けてあげ、久しぶりに三味線を取り出し、端唄の「梅にも春」を弾いた。

梅にも春の色そえて
若水汲みか 車舟戸

それは、鶴子が好きな唄だった。湯浦時代、鶴子は娘らに、日奈久から三味線の師匠を呼んで習わせたことがある。中でもつせ子は勘が良く、耳に覚えのある鶴子を満足させたものだった。

「よか音色ね…」

布団に横になり、鶴子がか細い声でそう言つて、三味線の音色に静かに耳を傾けた。

春が過ぎ、緑芽吹く季節が巡っても、鶴子の体調が戻ることはなかった。娘らの献身的な看病に支えられながら、病に倒れて5ヶ月後の嘉永6(1853)年5月21日、鶴子は帰らぬ人となった。誰をも分け隔てなく愛し、家族の心を照らし続けた56年の生涯は、幸せに満ち足りたものであった。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)
※()は30人以上の団体割引料金

